平成２１－２３年度
豊中市立図書館評価システム
自己点検報告書

平成２５年（２０１３年）１月

豊　中　市　立　図　書　館

１．この報告書について

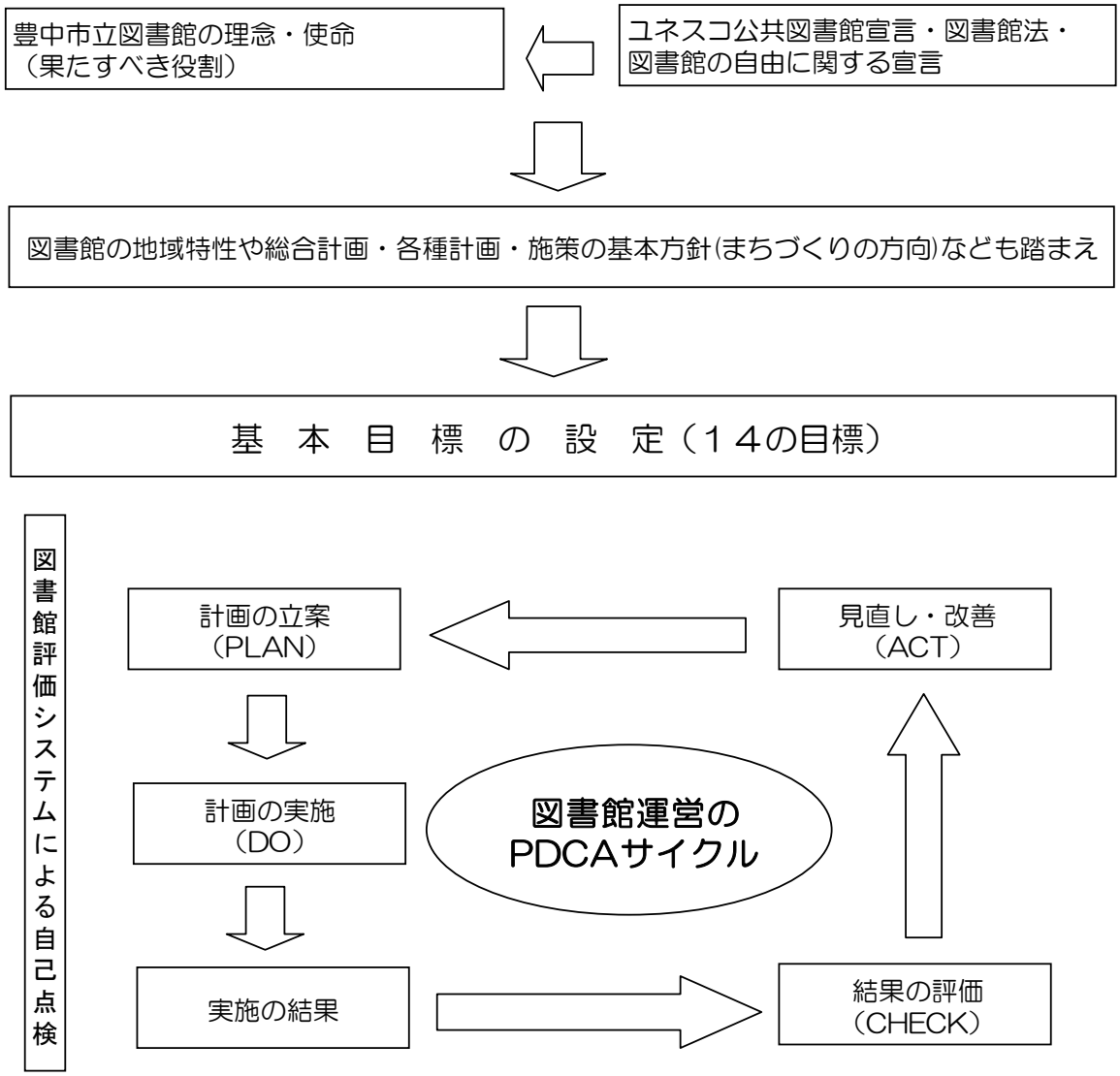
この報告書は、「豊中市立図書館評価システム評価表　リーディング項目」により、平成２１～２３年度の図書館運営を振り返り、自己点検の分析及び評価結果をまとめたものである。豊中市立図書館協議会より提言をいただいた「図書館評価のあり方について」に基づき、効果的・効率的運営と、より一層の図書館サービスの向上をめざして、自己点検と外部評価を実施している。

この自己点検及び評価結果に基づき、業務の改善及び効率化並びに市民サービスの向上に、取り組んでいくものとする。

２．図書館評価システムの体系

本システムの実施にあたっては、１４の基本目標を設定し、中項目・小項目ごとに自己点検を行い、進捗管理と内容の見直し等を行っていく。

具体的には、ＰＤＣＡサイクル（計画(Plan)－実施(Do)－評価(Check)－改善(Act)）を軸に、小項目を基本評価項目と位置づけ、評価分析を行い、図書館活動全体の自己点検を実施するとともに、図書館評価の的確なプロジェクト管理を行い、効率的・効果的な図書館運営の実現をめざすものである。



３．自己点検結果

自己評価するにあたって

評価を実施するに当たっては、次の３点を参考指標とし、下記表の評価基準に基づき、各中項目及び小項目に対して、相対評価を実施した。

〇相対評価の参考指標

（１）目標値に対する達成度

（２）全国平均値（全国人口３０万以上の６８市区（ただし、政令指定都市は除く。）との比較

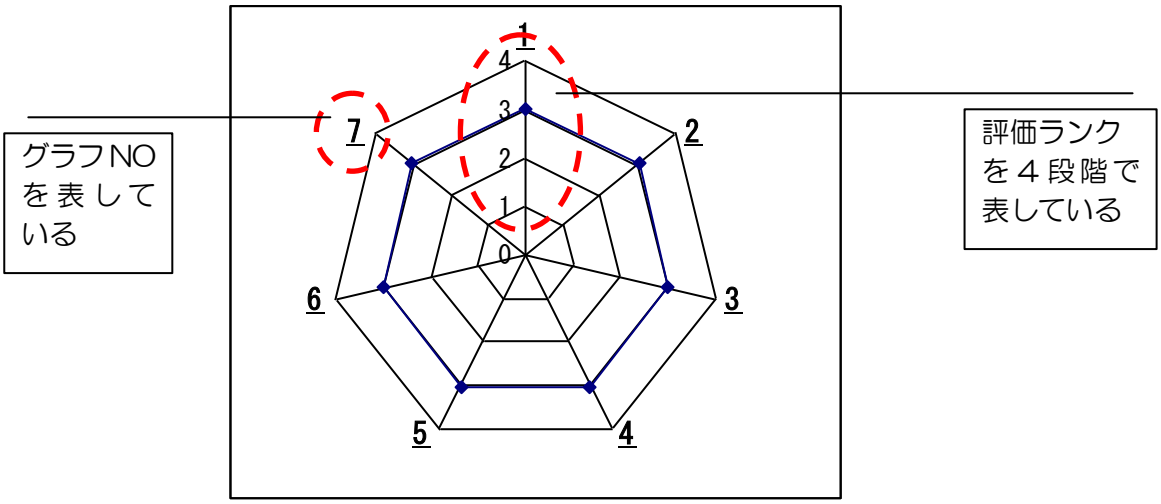
※全国平均値（「日本の図書館　統計と名簿２０１１」　発行（社）日本図書館協会を参照）

※なお、参考ではあるが、本市図書館の全国的な位置づけは、市民一人当りの蔵書冊数としては１６位、市民一人当りの貸出冊数としては１１位となっている。

（３）平成２１年度から平成２３年度の経年変化の平均値との比較

評価ランク	評価基準
4	（1）又は（2）の実績値を基準とし、当該実績値を達成した。
3	（1）又は（2）の実績値を達成できなかったが、当該実績値の８割以上は達成している。
2	（1）又は（2）の実績値を達成できず、当該実績値の８割未満であった。
1	取り組んでいない。

自己評価の結果は、中項目を評価の達成基準とし、次頁以降で「経営・運営・管理状況に関する評価」と「図書館の設置目的・使命の達成状況に関する評価」に分けて、レーダーチャート図により、各中項目の達成状況とパワーバランスを分析している。



Ⅰ　経営・運営・管理状況に関する評価

中項目　１．図書館として適切な経営が行われているか

評価ランク　２

＜振り返り＞

研修について、平成 21 年度から達成度の自己評価を行い、その情報をもとに、より適切な研修を計画的に実施。また、各館の業務上の都合で参加できる機会が限られるため、それを補うために図書館職員用の情報共有システムを活用し、研修記録を職員全体で共有している。

庁内及び図書館の内部研修は、人権研修を含め、市の職員として、また豊中市立図書館の職員として身につけるべき基礎研修を行っている。市の施策において目指す方向性の理解を深めるため、「地域自治システム」「協働」「学校図書館」「自殺予防対策」等に関わる研修に参加した。
また、図書館における市民との協働について、職員と市民ボランティアがともに学んだ。外部研修としては、大阪府立図書館等の研修に参加し、図書館業務の充実・向上につなげることをめざしている。

全国的に図書館評価システムや北摂アーカイブスへの関心が高いことから、全国図書館大会や図書館司書専門講座（文部科学省・国立教育政策研究所共催）において事例発表を行った。

図書館の数、配置の適切さについては、図書館業務の改善・集中化による効果的・効率的な運営体制の確立という観点から見直しをすすめた。南部地域（庄内・庄内幸町）のサービスエリアの重複や貸出密度が低いこと、未整備地域への対応が必要であること等の前回評価結果に基づき、サービスエリアの再検討を行い、市の基本政策である「読書活動日本一の取り組みの推進（蔵書の充実、学校図書館と公立図書館の連携）」を踏まえ、23 年度庄内幸町図書館に「学校図書館支援ライブラリー」を設置した。（仮称）南部コラボの計画の進捗にあたって南部地域の施設配置を統廃合を含めて再検討を行う。

また、図書館未整備地域の市民の利便性向上を目指して、23 年度吹田市と館を限定して広域利用（試行）を開始した。

＜課題＞

1. 日常業務の改善や職員のスキルアップに繋がる研修を充実させ、計画的な人材育成を行う必要がある。
2. 図書館利用が不便な地域が残ることから、市民の利便性向上への取り組みを継続し、全域サービスにつなげる必要がある。

＜今後の取組み＞

(1) 今後も、地域の知の拠点を担う職員として、地域の課題への理解を深め、業務のレベルアップにつながるよう、研修の実施と参加調整を行う。
(1) 24 年度作成中の「豊中市立図書館の中長期計画－グランドデザイン」の方向性に沿う人材育成に取り組む。
(2) 南部地域の利用状況等から施設見直しを行い、（仮称）南部コラボの可能性を見据えて、全館サービスの望ましいあり方を考えていく。
(2) 図書館の未整備地域について、広域利用の実施等検討を進めていく。

項目　２．市民にとって質の高いサービスが提供されているか

評価ランク　　３

＜振り返り＞

平成 20 年度に行ったアンケート調査等により祝日開館に対する需要の高まりを受けて、22 年度から４地域館の全祝日開館を実施。２年目には祝日の利用が７％増加した。今後も、祝日開館の実施について、あらためて広報に掲載するなど、市民にＰＲし利用促進をはかる。

図書購入費が増加しない中で蔵書新鮮度が伸び悩んでいる。23 年度は、総務省の交付金「住民生活に光をそそぐ交付金」を活用し、暮らしの課題解決に役立つ「医療・健康情報」（岡町）、「多文化共生」（庄内）、「ビジネス・就業」（千里）、「子育て・ＤＶ（ドメスティック・バイオレンス）」（野畑）の資料の充実をはかった。また、市政施行 75 周年を記念し、手塚治虫文庫を期間限定で開設。そのため、蔵書更新率が上昇したが、目標値には達していない。庄内幸町に関しては、２階を学校支援ライブラリーに機能変更するにあたり、資料の精査をすすめ、教員支援資料を整備した。その他視聴覚資料等については、雑誌の休・廃刊、ＣＤ・ビデオなどの消耗による除籍などにより減少している。

資料亡失対策について、千里では試行として 20 年２月リニューアルオープンを機に、無断持ち出し防止装置を設置し取り組んでおり、効果をあげている。

一方、全館的には、蔵書の亡失や落書き・切り取り・水ぬれなど資料の汚損・破損が多数あり、あまり改善がみられないのが現状である。ポスターの掲示や汚損・破損資料の展示等のマナーアップキャンペーンも実施し、対策に取り組んでいる。

＜課題＞

1. 開館日・時間について今後も利用者ニーズを把握する必要がある。
2. 資料購入費が伸び悩んでいる。
3. 共通書庫が満杯の状況にあり、収集・保存資料の見直しが必要である。
4. 資料亡失や落書き・切り抜き・水濡れ等が依然として多い。

＜今後の取組＞

(1)開館日・時間について今後もアンケート調査等によりニーズを把握し、状況に応じた見直しを検討していく。
(2)資料購入費の増額に努める。
(3)新刊やリクエストだけでなく、より効率的な図書購入と資料の運用に取り組んでいく。
市民の課題解決に役立つよう、今後も多様な資料の提供に努める。
(4)今後もマナーアップキャンペーン等の啓発活動を継続して行う。また、館内の巡回、フロアワークの時間を有効に活用し、資料亡失の対策に取り組む。
(4)資料亡失対策として無断持ち出し防止装置の全館設置を検討する。

中項目　３．市民参画による運営が図られているか

評価ランク　４

＜振り返り＞

平成 21 年度は豊中市立図書館の運営状況に関する評価についての検討を行うため、豊中市立図書館評価検討委員会を設置し、外部評価を実施した。

また図書館協議会には課題解決支援サービスについて諮問。地域の課題解決を支援し発展を支える情報拠点としての役割を２年かけて検討していただいた。今後、「暮らしの課題解決支援サービス」の取組みを進めるうえで、考え方の指針としていく。

いずれも公開で開催し、議事録や資料も全てホームページ等で公開している。ホームページのアクセス件数はいずれも目標値を達成。

図書館評価検討委員会についてのアクセスは、目標値を大きく上回った。他の自治体からの問い合わせを受けることもあり、関心の高さがうかがえる。

その他、しょうないＲＥＫをはじめとする市民団体及び市民との協働事業を継続して実施しており、図書館活動の活性化だけでなく、人の交流や地域の価値を新たに生み出す「場」としての図書館の役割につなげることを目指している。今後も図書館の運営に対する市民の積極的な参画の機会を大切にしながら、より効果的な図書館運営をすすめていく。

＜課題＞

○図書館活動に関する情報発信をさらに続けていく必要がある。

＜今後の取組み＞

○図書館協議会を定期的に開催し、課題に応じた意見反映をはかっていく。

○今後も外部評価によって、図書館活動の適正な運営を市民の視点で検証していく。

中項目　４．図書館の情報発信・ＰＲは十分になされているか

評価ランク　２

＜振り返り＞

情報発信・ＰＲについては、ホームページその他の媒体を通じて実施している。平成２１年３月にホームページをリニューアルし、情報発信機能を強化した。

全体として更新回数は目標値を達成していないが、新たに「豊中市新聞記事見出し検索」を導入し、記事見出しデータの追加更新を随時行っている。新着案内、図書館でのイベント情報等を配信するメールマガジンは協力する部局も増え、配信数、配信希望者ともに増加している。その他庁内情報共有システムに「庁内仕事応援サイト」を開設し、市職員向けに情報発信している。

発行物の配布数は減少したが、小学校の新１年生や３年生に対して図書館案内のチラシや「ええやん！しょうない」、「ＹＡ！ＢＯＯＫ通信」などは継続して発行している。また、２１年度には動く図書館の 60 周年記念誌を発行した。

＜課題＞

1. 図書館を利用したことが無い市民へのＰＲが不十分である。
2. ビジネス支援や障害者サービスなど多様な図書館サービスへの認知度が低い。

＜今後の取組み＞

○市民にとって必要な情報を適宜分かりやすく伝えることが出来るよう内容の充実や更新に努め、各種媒体による情報発信を強化していく。

(1)マスコミもＰＲの手段として積極的に活用していく。

(2)サービスの認知度の低いものについて、重点的に啓発及びＰＲ活動に努めていく。

中項目　５．その他運営の健全化への対応は図れているか

評価ランク　２

＜振り返り＞

リスク管理及び個人情報保護等については、講座やｅラーニングによる研修を受講し、適正な管理に努めている。図書館評価システムの確立は、運営の健全化はもとより、評価や説明責任の取り組みという観点からも有効であった。引き続きリーディング項目について毎年自己点検を行うとともに、定期的な外部評価を通じ、図書館サービス全体の適正化を図っていく。また、評価作業に取り組むことを通じて、図書館の使命と役割及び位置づけを再認識し、業務の見直しと改善を図りながら、図書館運営に取り組み、新たにつくられた行政評価制度や教育行政方針に反映していく。

＜課題＞

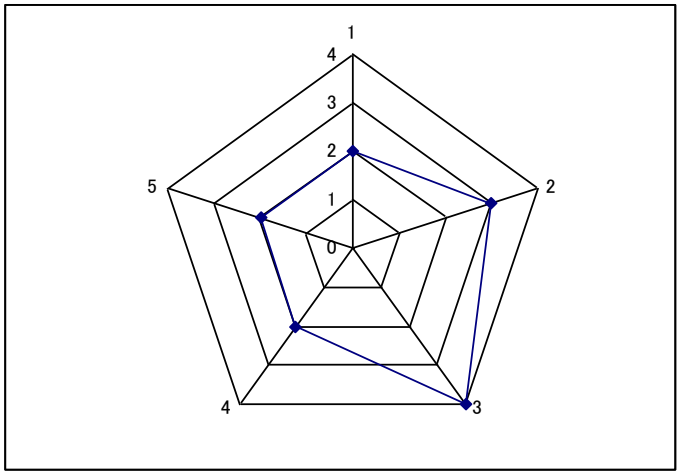
1．評価システムの効率化と職員間での共有化が必要である。

＜今後の取組み＞

○個人情報の保護と適正な管理に継続して取り組む。

(1)評価システムを全職員で共有し、業務改善に取り組む。

(1)評価システムの指標の見直しを行う。



グラフNO	中項目
（1）経営・運営・管理状況に関する評価	
1	図書館として適切な経営が行われているか
2	市民にとって質の高いサービスが提供されているか
3	市民参画による運営が図られているか
4	図書館の情報発信・PRは十分にされているか
5	その他の運営の健全化への対応ははかれているか

Ⅱ　図書館の設置目的・使命の達成状況に関する評価

中項目　１．市民が求める資料や情報を収集し、迅速・的確に提供できるか

評価ランク　３

＜振り返り＞

貸出冊数は千里図書館リニューアル（平成 20 年２月）をきっかけに２年連続で前年実績を上回ったが、新型インフルエンザの流行といった特別な要素があり、全体として利用は横ばいから少し減少傾向にある。

限られた資料費のなかで、複本数を抑えていることもあり、予約資料の回転が遅くなっている。この数年で図書館利用をめぐる様々な変容が見られ、来館時に予約資料のみを貸出する利用形態が多くなっている。この背景としては、幅広い年代にこの数年で一気に携帯端末が普及し、簡便な情報検索が事足りるようになったことで、来館前から見当をつけた資料に限定してリクエストし、借りる利用スタイルの普及が考えられる。

地域館４館の祝日開館は、新規開拓の側面よりも、来館の機会が増えることで利便性向上の側面が大きかった。まだ祝日開館の有無について問い合わせが多いことから、ＰＲを引き続き行う必要がある。

23 年５月から吹田市との広域利用の試行を開始し、対象館である千里・高川・東豊中のうち、交通の便のよい千里の利用が特に多く、登録人数も増加、貸出冊数も、全体に減少している中、千里では増加した。

リクエストサービスについて、カウンターやＯＰＡＣでの予約は、ほぼ横ばいであるが、ＷＥＢでの予約の受付件数が増加している。新聞やインターネットなどでの話題本や新刊本にリクエストが集中し、資料の回転率や貸出密度の減少につながっている。また、WEBOPAC での継続手続きが浸透したことにより、継続冊数が増加している。

レファレンスサービスについて、簡易なレファレンスを含む資料案内数は増加している。レファレンスを受ける中でリクエストにつながる事例も多い。19 年度以降、年度ごとの件数にあまり変化は見られないが、インターネット上の情報利用が市民生活に定着し、資料の所在情報等も図書館ホームページの活用により容易に得られるようになったことから、レファレンスはより専門的な内容のものが増加する傾向にあると考えられる。21 年度途中から、レファレンスサービスを充実させるためｅ－レファレンスを開始しているが、利用は少ない。22 年度からは調べるための道しるべとなるパスファインダー「検索なび」作成に取組み、東日本大震災直後には特別版を、23 年度は、「暮らしの課題解決」のテーマに沿ったものを作成（合計 12 種類）配布した。
また、国立国会図書館のシステムを活用し、図書館ホームページでレファレンス事例の公開を開始した。

＜課題＞

1. 図書購入費の潤沢でない現状では、リクエストや返却の多い館に新鮮な資料が留まらないよう、資料の入れ替えを行う必要がある。
2. WEB でのリクエスト利用のように特定の資料の貸出だけでなく、来館した利用者が多様な資料に出会える書架構成にする。
3. レファレンスサービスを充実させるためｅ－レファレンスを開始したが、今のところ利用は多くない。市民への周知がすすんでいないことが原因にあると思われる。
4. レファレンス事例の公開数を増やし、分析することにより課題を明確化するとともに、一人でも多くの市民に利用される図書館をめざして変化する利用者ニーズを把握する必要がある。

5. レファレンス統計は、機械的に集計する指標とは異なり、職員の意識の差により数値が大きく変動する項目でもあるため、実態を反映した集計を行う必要がある。

＜今後の取組み＞
○岡町・庄内・千里・野畑図書館での祝日開館のＰＲに努める。また、新たな利用者層を開拓していくことを目指し、利用の増加につながるように取り組む。
○ニーズにかなった資料提供を行うために予約やレファレンス内容を分析し、資料運用や選書等に反映させることで、より充実したサービスを提供できるよう努力する。
○館間でこまめな資料の入替えを行ったり、展示や書架配置や表示の工夫など、利用者にとって新鮮で充実した書架づくりを目指す。
○ホームページ等を活用し、来館のきっかけになるような情報の提供を検討する。
○利用者が職員に気軽に問いかけできるような、館内サインの工夫や雰囲気づくりに取り組む。
○レファレンスインタビューを丁寧に行うことで、必要とされる資料のリクエストに結びつくよう窓口対応やフロアワークをさらに徹底する。
○レファレンスサービスの PR をはかるとともに、利用者自身の情報検索の支援、および図書館からの情報発信という位置づけを確立していく。
(1) (2) (4) 予約やレファレンス内容を分析し、資料運用や選書等に反映させることで、より充実したサービスを提供できるよう努力する。
(2)利用者にとって充実した魅力ある書架となるよう図書とともにＣＤなどのＡＶ資料についても計画的に収集し、資料展示の工夫や検索ツールの充実などにも取組み、一人でも多くの市民に利用される図書館をめざして、来館者・貸出冊数の増加につながるよう努める。
(3) (4) 現在取組んでいるレファレンス事例の集約をすすめ、図書館ホームページの公開数を増やし、ｅ－レファレンスの利用につながるような積極的なＰＲを行っていく
(4)今後も市民ニーズを反映した「検索なび」の作成と内容の更新を行う。
(5)レファレンス統計は、集計方法を工夫し、精度を高め、実態を反映したものにしていく。

中項目　２．他の自治体の図書館や大学・類縁機関との相互協力をすすめているか

評価ランク　３

＜振り返り＞
自治体との相互協力、特に近隣との自治体においては箕面市につづいて、平成 23 年度より吹田市とも広域利用（試行）を開始し、市境に在住する市民の利便性が向上した。市民の利便性や地域課題に対応した施設の配置と運営をめざすという目標に向かって一歩一歩進んでいるといえる。
府内の他の自治体の図書館についても、大阪府立図書館の府内協力車のサポートにより、スムーズに資料を借りることができるため、迅速な提供が可能になっている。限られた予算で効果的な蔵書構成にするためにも、相互貸借を利用した資料の提供は必須である。
大学・類縁機関に関しては、紹介状の発行や複写依頼をおこなっているが、同じ利用者が複数回利用されることも多い。また国立国会図書館や府外の図書館資料への取り寄せや複写依頼などのニーズにも対応している。

＜課題＞
1. 現在行っている広域利用については、貸出冊数の不均衡や、交通の便が良い図書館のみに利用が集中するなど、バランスがとれていない部分もある。

2. 府外の図書館や国立国会図書館などからの資料の取り寄せについて周知が不十分である。
3. 大学・類縁機関等との連携については、まだ未着手の部分がある。

＜今後の取組み＞

(1) 豊能地区の池田市、豊能町、能勢町も加えた３市２町において全館を対象にした広域利用の調整を行い、24 年度の実施につなげた。その他、市の西部地域と隣接した自治体の図書館の配置と豊中市民の移動経路・交通手段の傾向を調べ、市民の利用が見込まれる連携を検討する。また、広域利用の格差是正に向けて対象となる自治体との調整を行っていく。
(2) 必要な人に必要な資料を手渡せるよう、図書館ネットワークを活用した資料の取り寄せについて周知する。
(3) 大学図書館や類縁機関への紹介状の発行や複写依頼などは、学校などに属していない市民が、専門的な資料提供を受ける場合のなくてはならないサービスである。他の図書館と大学図書館などの連携事例の研究を通じて、地域情報の掘り起こしと有効活用の視点等新たな可能性を検討していく。

中項目　３．市内の公共施設との連携・協力を推進し、市民の多様な情報ニーズに応えているか

評価ランク　　４

＜振り返り＞

サービス指標の中に具体的に挙げられている各施設や部局（公民館・人権まちづくりセンター・教育センター、地域教育振興課や学校・幼稚園・保育所・子育て支援センターなど）に対しては、共催事業や講座等が定着し、相互理解が深まり、細やかな連携がとれてきている。

しかし「とよなか国際交流協会」は、指定管理者への移行や平成２２年度の移転などの要因もあり、「おやこでにほんご」とその関連事業以外の連携が、断続的になった部分もある。

子ども読書活動に関係した部分で、連携・協力がとりわけ大きく前進・定着してきたとも言える。子育て支援センターや子育てサロン・子育てサークル（社会福祉協議会）への絵本講座、ブックスタート事業「えほんはじめまして」「すくすくあかちゃんタイム」「妊婦教室」（保健予防課）、保護者や教諭向けの絵本講座など、充実・発展してきた事業も多い。

また、これまであまり繋がりのなかった部局・団体に対しても 22 年度本格運用を開始した庁内ＬＡＮを使った市職員向けの「庁内仕事応援サイト」の活用や各職階別研修などでＰＲに努め、働きかけを行ってきている。

さらに、23 年度は「住民生活に光をそそぐ交付金」を活用し、暮らしの課題解決支援サービスに取り組み、関連する庁内各部署や関係機関、各施設との連携を開始、新たな一歩を踏み出した。市立豊中病院から講師を招いての講演会や地域経済課などが行う「とよなか産業フェア」への参加、地域保健課が行う健康カレッジへの協力など、今後定着していきそうな事業も始まっている。

＜課題＞

1. 総体的に、全体の事業の中では、まだ子ども読書関係が主なもので、大人向けの共催・協力事業は少ない。
2. これまであまり繋がりの無かった部局・団体に対しての働きかけも実施、暮らしの課題解決支援サービスの取り組みから新たな連携・協力も始まってきているが、市役所各部局・関係機関・施設の中で、相対的には図書館サービスに対する認知度はまだ高くないと感じられる。
2. 多文化共生をすすめる他部局や関係機関をはじめ、市民団体との協力が不可欠である。

＜今後の取組み＞

○各機関と連携を深めることにより、それぞれが持っているノウハウを生かして図書館来館者だけではない幅広い利用者へのサービスにつなげるため、これまで、あまり繋がりのなかった部局・団体の動向に目を配り、図書館との連携・協力で市民サービスを向上させられる可能性を提示・提案していく。

○地域課題解決のために、各部局・関係機関が持つ情報を積極的に収集し、提供できるようにしていく。

○定着してきている各施設・部局との連携を継続しつつ、効果的な実施について検証を行い、地域の活性化・課題解決に貢献する取り組みを充実させていく。

(1)子ども読書活動推進計画第２期実施計画の進捗状況に沿って、取り組みを精査し、事業内容の充実をはかる。

(1) (2) 課題解決支援サービスについては今後も継続して行い、関連部局や機関との連携も引き続き進めていく。

(2)行政支援サービスにおいては、「庁内仕事応援サイト」の活用、研修への参加など人材育成等にも関わりながら、他市での事例を調査するなど支援への新たな展開を研究する。

(3)多文化共生の取組においては、国際交流協会に限らず、関係する部局や機関・団体等に対し働きかけを行い、持続的な連携・協力関係を構築する。

中項目　４．ＩＴを活用した図書館サービスの向上を図るとともに市民の情報活用を支援しているか

評価ランク　３

＜振り返り＞

平成 21 年３月図書館システムのリプレイスを契機に、ＩＴを活用した図書館活動を推進してきた。携帯サイトを開設した他、インターネットからの継続手続き、e-レファレンスサービスの提供など利便性の向上に努めている。また、「豊中市新聞記事見出し検索」データベースやパスファインダー「検索なび」、レファレンス事例の公開、暮らしの課題解決ページなど、情報提供機能の充実を図った。また、「北摂アーカイブス」を開設、メールマガジンの発行など地域情報も発信している。

ホームページのアクセス数、ＷＥＢ予約数は年々増加している。一方、館内ＯＰＡＣからの予約は、23 年度は減少した。

館内でのインターネット利用の利用については、端末数も増加し、周知されてきたことから、利用が増加している。

当初、ビジネス支援での活用を主な目的として導入したデータベースの利用は、データベース数の減少もあり、利用人数は減少しているが、職員が日常的にレファレンスで活用している。また、23 年度に、住民生活に光をそそぐ交付金を活用した課題解決支援サービスでビジネス支援の資料を充実させ、市の産業フェアにも出店し、サービスをＰＲすることができた。

e-レファレンスの件数も少しずつ伸びてきてはいるが、まだ利用は少ない。

＜課題＞

1. e-レファレンスの利用が少ない。
2. データベースの利用が少ない。
3. ＷＥＢで予約した資料を借りに来館するだけの利用の増加している。
4. インターネット環境がない利用者、パソコンに不慣れな利用者に対するフォローが必要である。

＜今後の取組み＞
○次期システムに向けて、ホームページの更新がスムーズにできるようシステムの検討をすすめ、更新頻度をあげ、情報の鮮度を保つよう努める。
○利用者にとって魅力的で使いやすいホームページ、メールマガジンの内容、デザインを検討していく。
○電子書籍等、新たなサービスについても研究していく。
(1) (2) e-レファレンス、新聞記事見出し検索サービス、データベース、インターネット利用端末の具体的な活用事例紹介等、効果的なＰＲを検討する。
(3) (4) インターネット上だけでなく、紙ベースでの情報発信や、館内の展示・書架の工夫、行事などにより、利用者が来館して得られる情報の提供、ＰＲにも努める。
(4)インターネット検索、データベースの利用法の講習等、利用者が自分で目的の情報、資料に辿り着けるよう支援する。
(4)館内で利用できるインターネット端末を増設する。

中項目　５．子どもの読書活動を推進しているか

評価ランク　３

＜振り返り＞
●個人貸出について
子どもへの資料提供は、年度によって３～５％の増減はあるものの、３年を通してほぼ横ばいとなっている。少子化や、新型インフルエンザ等の社会的なマイナス要因があったものの、「えほんはじめまして」等の乳幼児への取り組み、学校や地域の子ども向け施設との連携事業などの地道な取り組みがプラス要素となり、大きな変動にならなかったものと思われる。
また子育て世代を含む子どもに接する大人への取り組みとして、妊婦教室での絵本講座や読み聞かせボランティア講座、子育てサロン等への出前講座、保育所・園に対するサービスなど、積極的に働きかけを行っている。それらの取り組みにより、児童書の貸出冊数は、保護者や子どもと本をつなぐボランティアなど、子どもを取り巻く大人への貸出が増えた結果、増加につながった。
●団体貸出について
地域の子ども関連施設への団体貸出については、これまでも連携を進めてきた子ども文庫に加え、子ども読書活動推進計画の進捗により連携が進み、地域子育て支援センターや放課後こどもクラブなどへの貸出も増加し、利用が定着している。保育所のお散歩来館も増加した。
●おはなし会など子ども向け行事
おはなし会については、地域の実情に合わせて、対象者の年齢を分け実施したり、０歳向けおはなし会の回数を増やすなど工夫している。保育所のお散歩での来館時に行う「おさんぽおはなし会」や、小・中・高校生・大学生ボランティアによる幼児・小学生向け紙芝居会も実施している。小学生の参加が課題となっていたことから、夏・冬・春休みなどに実施する館が増えている。各館で、長期休業時には主に小学生を対象として、手作り工作などの催しを実施している。
●学校への支援
子どものライフステージにおいて重要な位置を占める学校への支援として、学校・学校図書館・学校司書との連携を進め、その充実に努めている。24 年度には庄内幸町図書館に「学校図書館支援ライブラリー」を設置し、25 年度には「とよなかブックプラネット事業」を本格実施する。
●ヤングアダルトサービス
中学生・高校生（ＹＡ世代）に対する読書環境の整備が課題であった。20 年２月に千里図書館のリニューアルをきっかけに始まったヤングアダルトサービスの本格的な取り組みである「YA!BOOKS」では、興味・要求や利用形態の異なる対象ごとに最適なサービスを提供するというコ

ンセプトに基づき、中学生・高校生に最適な読書環境を提供できるよう努めている。２２年度には、高川、東豊中、23 年度に岡町に順次拡大した。

●えほんはじめまして

保健予防課（旧健康支援室）との連携で始めた「えほんはじめまして」は、豊中子ども文庫連絡会との事業協力も定着し、開始から９年を経た 23 年度より、従来の取り組みに加えて、会場で絵本と出会った親子が家庭でも楽しめるよう絵本を１冊手渡すブックスタート事業として拡充した。23 年度にはボランティア講座を開催し、スタッフを募集、新たに 14 名が加わった。各会場では絵本と赤ちゃん、保護者をつなぐ活動を行っている。豊中子ども文庫連絡会と協働で、スタッフミーティングを開催し、新たに加わったスタッフを含む、関係者間で情報共有と、意見交換、研修などを行った。「えほんはじめまして」の次の段階の取組みとして、１歳から２歳くらいまでを対象とした絵本紹介リーフレット「こんにちはえほん」を新たに作成し、１歳６か月児健診で配布した。

＜課題＞

1. 子どもの成長過程に合わせた最適な読書環境の整備
2. 目的を明確にした行事の精査と効果的な開催への全館的な調整
3. ヤングアダルトサービスの取り組みの強化
4. 孫育て等、子育て世代以外の大人への取り組み
5. 職員のスキルアップ（出前講座等で講師となる職員の研修と育成、内容の充実）

＜今後の取組み＞

○22 年度に策定した「豊中市子ども読書活動推進計画第２期実施計画」に沿って子どもへの取り組みを進めていく。

○「えほんはじめまして」やヤングアダルトサービス、学校への支援など、市民との協働が深まる中、情報交換を密にして、互いの目的の共有を図り、子どもの読書環境の充実に努める。

(2) 時代のニーズや、地域の子どもの実情に合わせて、内容を精査し、利用の拡大につながるようなプログラムの提供に努める。
各館の行事を集約して、ＰＲを行うなど、効果的・効率的に実施する。

(3) 担当者会を開催し、取り組みやノウハウを共有する。YA 向けポータルサイトの開設や、メールマガジンの配信など、ICT を活用した情報サービスを検討する。

(4) 校区連絡会などに参加し、地域の情報交換と課題の共有に努める。

(5) 計画的な研修の実施、個人の希望による参加だけではなく、児童サービスに必要なスキルの洗い出しと、それに基づいた体系的な研修計画の策定を行う。

中項目　６．学校・学校図書館への支援と連携を推進しているか

評価ランク　　３

＜振り返り＞

貸出冊数・予約件数がやや減少傾向にあるが、学校図書館で過去の事例によるノウハウが蓄積され、それに基づいて各校の蔵書整備が充実してきていることや、学校図書館間における資料の相互利用の増加等の背景が遠因と考えられる。平成 21 年度よりインターネットでの継続貸出が可能になり、毎年約１万冊の利用がある。システム更新の結果、有効に資料が活用されている様子がうかがえる。

21 年度の２学期からは通常の貸出分に加え、学期ごとに絵本や読みものを 50 冊追加して貸出する取り組みを開始したが、ニーズとのズレや手間の問題などがあり今のところ利用は少ない。23

年度には新たに、課題解決の取り組みの１つとして調べ学習用の資料を選書した。その際には各館で把握していた調べ学習やよくあるレファレンスのテーマを参考に選書を行い、24 年度からの貸出開始を予定している。
庄内幸町図書館に設置した「学校図書館支援ライブラリー」ではモデルケースとして新たな支援について対象校の学校司書と相談しながら進めており、対象校に対して貸出パックの巡回貸出や夏・冬休み用に読み物・絵本の貸出を行っている。
　減少傾向だったレファレンス件数は増加しているが、これは学校図書館においてテーマに基づく資料探しが増えるなど、教員からのレファレンスが増加していることが背景にあるとうかがわれる。学校司書も経験を積んでおり、自身で必要な資料を特定して取り寄せ活用するなど、公共図書館へのレファレンスの仕方も精査されてきている感がある。
　また 22 年度からは「学校図書館と公共図書館の蔵書を一体的かつ効果的に活用する環境を整備することにより、児童生徒の読書活動を促進し、自ら学ぶ力を育成する」ことを目的とする、「とよなかブックプラネット事業」が展開されている。平成２２年度に概念設計を行い、平成２５年度の実施に向けて取組みを進めているところである。この事業では学校司書や司書教諭を対象とした研修を行ったり、市民向けにもフォーラムを開催。また各学校を訪問して実情を聞き取るなどの取り組みを進めている。
　このほかに公共図書館職員が講師となり、図書館ホームページを利用した本の探し方を学ぶ授業を、学校からの要請に応じて出向くこともしている。

＜課題＞
1. 学校図書館への資料支援のあり方については、学習百科事典「ポプラディア」のセット貸出や調べ学習サポートパックの貸出が有効であり、今後も多様な手法を検討する必要がある。
2. 調べ学習サポートパックの利用促進をはかる。
3. レファレンス事例を共有する。
4. 公共図書館司書と学校司書が情報共有をはかり、個々の学校図書館の状況に応じてサービス提供を行い、連携を進めていくことが今後も必要である。
5. 学校・学校図書館への支援・連携のさらなる推進に向けて動き出すこと。
6. 「学校図書館支援ライブラリー」での取り組みを検証し、全市に拡げられるサービス内容の精査をする。
7. レファレンス件数のカウントは各人の感覚に微妙なズレが生じることもあり、各館により数値が一定しない。

＜今後の取り組み＞
○各館と学校図書館との連携について、引き続き実情の把握とサービス内容の充実に努める。
(1) 学校現場の状況把握に努めながら、その情報を各館で共有し円滑な資料提供を行っていく。
(2) 調べ学習サポートパックの貸出方法などを整備し、このサービスについてＰＲを行い、学校図書館を通じて授業で活用してもらう。
(3) これまでのレファレンス事例を公開し、学校図書館で活用できるよう取り組む。
(4) 各館と学校図書館との連携については、引き続き日頃からの実情の把握を行うことや、公共図書館司書と学校司書の会合を年２回に増やすなど、情報共有の場を確保してサービス内容の充実に努める。
(5) 「とよなかブックプラネット事業」では 25 年度の本格実施に向けて、物流の充実や学校図書館システムの導入など、具体策を実施していく。
(6) 「学校図書館支援ライブラリー」では引き続き、対象の学校図書館の実情把握とサービス内容の充実に努める。また、教員向け資料の選書を続け、市内の学校に勤務する教員を対象に貸出を開始する。
(7) レファレンス件数の正確な数値把握のため、実態を反映できるようカウント方法の基準作成

を検討する。

中項目　７．高齢者、障害者および外国人の読書環境づくりをすすめているか

評価ランク　　３

●高齢者の読書環境づくり

＜振り返り＞

高齢者の個人貸出については、対象人口の増加に伴い人数、冊数ともに増えている。高齢者の利用傾向に配慮した選書を心がけたことも増加要因のひとつと考えられる。また利用者のなかには、図書館館内に終日滞在する方も多く、居心地のいい身近な公共施設として、図書館が認識されている様子がうかがえる。

高齢者施設の団体利用について、登録団体は貸出増加の傾向にあり、利用が定着している。地域の高齢者施設は年々増加しており、図書館への潜在的な需要は高まっていると思われる。またこうした高齢者施設にむけてのサービス形態は、そのニーズに応じて多様なものとなっている。図書館が選書・配本するケース、施設職員が来館して資料を選んでいくケース、施設職員とともに高齢者が直接来館して貸出をおこなうケースなどがある。

＜課題＞

1. 図書館サービスそのものを知らない高齢者が多い。
2. 高齢者の環境、要望はさまざまで、一人ひとりの満足度を高めるようなサービスのありかたを検討していく必要がある。
3. 高齢者の心身の状態に応じた柔軟な対応が求められる場面が増えている。
4. 高齢者のなかには情報を得る機会が乏しい人も多く、とくにコンピュータ・ＩＴに不案内な高齢者にはその橋渡しの役割が必要となる。
5. 地域に新しく増えつつある様々なタイプの高齢者施設の把握が遅れている。

＜今後の取組み＞

○　関係機関や他部局との連携により、情報の入手や高齢者への情報提供に努める。

(1)（2）高齢者自身の身近な問題を解決する手段として、また生活のはりあいや楽しみを提供す場としての図書館をＰＲする。

(2)自らの学習成果の発表や交流の場になれるような取り組みを検討する。

(3)来館理用が困難になった高齢者に対しては、宅配などの利用方法を案内し、利用の継続を支援する。

(4)ＯＰＡＣや図書館ホームページの初歩的な使い方など高齢者への具体的な利用支援に取り組むとともに、よりきめ細やかなフロアーサービスを実施する。

(5)小規模多機能ホームまで含めた、地域の高齢者施設の把握につとめ、図書館サービスのＰＲや利用の掘り起こしを行う。

●障害者の読書環境づくり

＜振り返り＞

障害者サービスについては、デイジー図書の普及やインターネットからダウンロードできる環境（「サピエ図書館」）の整備が進み、そのツールの面での利便性は向上した。声の広報がカセットからデイジーに移ることをきっかけに、担当課から利用対象者にデイジー図書への対応が可能かどうか個別の調査が行われたことが、図書館でのデイジー図書の利用促進にもつながった。また図書館のホームページ上に点字図書やデイジー図書の新着案内を掲載するなど業務の改善につとめた。その反面、宅配や対面朗読などのサービスについては、件数や数値に大きな変化が見

られない。
　宅配については、各館の担当職員が個々の利用者の事情にあわせ、信頼関係を築きながら行っている。
　対面朗読については、利用者の要望に応じて自宅から近距離の分館で実施している。
　障害児通園施設へはこれまでも動く図書館による巡回サービスをおこなってきたが、新たに民間施設への団体貸出を開始した。

＜課題＞
1. 障害者サービスを知らない利用者に対して、情報提供が必要である。
2. コンピュータ、ＩＴに不案内な利用者にとっては、図書館からの橋渡しの役割が引き続き重要になる。
3. サピエ図書館への入会登録を行い、より多くの情報を提供する必要がある。
4. 宅配については、各館の担当職員が個々の利用者の事情にあわせ、信頼関係を築きながら行サービスのため、件数が増加した場合の対応が難しい。
5. 郵送貸出については、郵送費の問題があり積極的に実施できない状況である。

＜今後の取組み＞
(1)障害者やその周囲にいる人々に対して、障害者サービスの内容を丁寧かつわかり易く情報発信し、潜在的な利用者の掘り起こしにつなげる。
(2)デイジー図書再生機の利用方法などを引き続き案内し、貸出用の機器の更新に取り組む。
(3)サピエ図書館への入会登録を行い、データのアップロードとダウンロードを可能にする。
(4)従来のきめ細やかな宅配サービスの良さを活かしながら、全館的な宅配システムの再構築を検討する。
(5)郵送貸出については郵送費の確保に努めるとともに、宅配サービスとの適切な組み合わせについて、中長期を見据えて検討していく。
○図書館へ来館困難なこどもたちへのサービスを、動く図書館や団体貸出を可能な限り活用して進めていく。

●外国人の読書環境づくり
＜振り返り＞
　多文化サービスについては、とよなか国際交流センター等との連携、協力関係をより密にするかたちで環境整備を進めてきた。子ども読書活動推進計画で「障害のある子どもや外国人の子どものグループ」のワーキンググループによる連携をもとに、読書環境の整備に取り組んできたことが背景にある。
　具体的には図書館利用案内の多言語版（7ヶ国語）と、カウンターでのコミュニケーションツールとしての「指さし確認シート」を作成し、さらに平成 22 年度には岡町図書館「世界のこどもの本の部屋」の蔵書リストを各言語別にそれぞれ完成させた。23 年度は「住民に光をそそぐ交付金」を活用した課題解決のチームとして、多文化共生支援サービスという観点からその取り組みを強化した。豊中在住の外国人の方への資料提供を促進するために、これまでの児童向け資料に加え成人向け資料を新たに購入し、庄内に「多文化共生コーナー」を設置した。
　多文化共生のための催し・取り組みとして、「子どもと本のまつり」「千里コラボまつり」の中で外国語のおはなし会を行ったほか、外国人親子の居場所づくりである「おやこでにほんご」に図書館としても関わっている。これらの催しは市民が各国の母国語や文化に親しむ機会となるとともに、豊中に住む外国人の方からの情報発信の場ともなっている。
またホームページへの言語別資料リストの掲載や、英語以外の言語資料の書誌データを作成しリスト化することにより、外国語資料の利用しやすい環境整備をすすめた。

＜課題＞
１．多文化共生という理念が浸透していない。
２．豊中在住の外国人の方のニーズの把握が課題である。
３．多言語資料の収集は、まだ十分でない。
４　外国語のおはなし会の継続性と読み手の確保が課題である。

＜今後の取組み＞
(1)多文化共生という理念の共有を進めるために、「しょうないＲＥＫ」や千里コラボの「多文化カフェ」など市民との協働による取組みを進め、ＰＲに努める。
(2)とよなか国際交流センターや民間の関係団体等と連携を図りながら、ニーズの把握に努める。
(3)多言語資料の収集のため、課題解決支援サービスの取組みを継続するとともに、寄贈依頼などのＰＲも推し進める。
(4)外国語おはなし会の継続と読み手の確保に努める。
○図書館で購入した外国語資料や日本語学習のための資料をとよなか国際交流センター等へ貸出することを検討する。

中項目　８．地域の情報センターとして積極的に活動しているか

評価ランク　　３

＜振り返り＞
平成 21 年度には、これまで蓄積してきた豊中関連の新聞記事のデータベースを「豊中市新聞記事見出し検索」データベースとしてホームページに公開した。以降、継続してデータを追加入力している。このデータベースは、庁内ＬＡＮの「庁内仕事応援サイト」へリンクし、庁内向け情報提供の一部としても活用している。
また、地域情報のアーカイブ化事業に取り組み、「北摂アーカイブス」をホームページ上に公開した。「地域の記憶を地域の記録へ・・・」を合言葉に、市民との協働で取り組む「北摂アーカイブス」には、年間７万件前後のアクセスがあり、全国各地において地域情報の価値の再発見、およびデジタル化が進められるなかで注目を受け、問い合わせや事例発表の依頼が多く寄せられている。23 年度には「北摂アーカイブス」が紹介された書籍が２冊出版されたほか、国立国会図書館公共図書館のデジタルアーカイブ推進会議により優良事例に選ばれた。さらに、市役所ロビーや豊中・箕面の図書館で写真展なども行い、好評を得ている。
さらに２３年度には、豊中関連の歴史的なできごとやゆかりの人物の紹介、豊中の散策スポットやビジネス、交通やイベント情報をまとめて案内する“「とよなか」ってこんな街！”をホームページに掲載したほか、地域情報のアーカイブ化事業の一つとして、音声で聞ける「豊中の民話」をホームページ上に掲載した。
従来から取り組んでいる資料の展示については、各館限られたスペースの中で展示スペースを確保し、ほぼ月単位で各種のテーマ展示・巡回展示を行うと同時に、千里コラボにおける協働事業「大人のための絵本カフェ」で職員が大人向けに絵本を紹介したり、職場体験時の中学生や、小中学校図書館や高校との連携によるおすすめ本企画展示など、多様な視点からの資料情報の紹介を行い、資料と利用者の出会いにつながるよう努めた。
23 年度から取り組んだ「暮らしの課題解決」支援資料の常設館では、関連資料・情報を組み合わせた展示を行い、「なぜ図書館でビジネス支援かと思っていたが、情報・本・人が集まる場所で誰もが気楽に入れる場所だからこそ必要なことだ。特に、行き場のない若者の就労支援に力を入れてほしい。」「この医療健康情報コーナーは画期的なチャレンジだ。資料の充実と並べ方が良い。知り

たい知識をすぐに得ることが出来、助かっている。表示が細かく分かれていて親切だ。」という利用者からの感想が寄せられた。また、「予約架に何度も、子育て・ＤＶ関連の特集展示の本を見かけた。他館から予約をしてでも資料をご覧になりたいという方が大勢おられることがわかる。ＤＶ相談先などのミニ冊子を化粧室などに置くと、よく持って帰られた。」というような職員による利用状況の報告もあった。「庁内仕事応援サイト」においてもテーマ別新着リストを掲載するなど、市民および市職員への情報提供の機会を増やし、図書館全体で地域の情報センターとして取り組んでいる。

また、市民に向けての人権啓発活動については、地域の団体との共催等により、人権に関する講演会を開催したほか、暮らしの課題解決支援サービスのひとつの取り組みテーマに設定した「子育て・ＤＶ」に関して、パネル展や講演会を行った。今後もあらゆる機会をとらえ、人権課題の解決に向けて効果的な啓発が行えるよう、講演会のテーマや手法等を検討していく。

＜課題＞

1. 今後も市民とともに、積極的に地域情報の「蓄積・編集・発信」を行う必要がある。
2. 現在のデジタルアーカイブ事業を継続発展させ、今後は図書館が所蔵する古文書など、紙媒体で残された地域資料のデジタル化・公開に向けて検討を重ね、取り組む必要がある。
3. デジタル化されていない紙媒体の地域資料・行政資料についても、利用者にとって活用しやすいようにさらに整備を進めるとともに、情報発信に努める必要がある。
4. 今後、さらに暮らしに役立つ情報提供に取組む。

＜今後の取組＞

(1) 地域の“今”と“昔”、どちらの情報も図書館が提供できることをアピールし、地域の情報センターとしての図書館の役割を果たすよう、あらゆる機会をとらえ、方法を検討･工夫していく。
(2) (3) これまで収集・保存・蓄積してきた紙媒体の地域資料についても、デジタル化・公開を目指して取組み、各世代の市民が地域資料・行政資料を幅広く活用できるよう、展示紹介や情報発信に取り組んでいく。
(2) 「北摂アーカイブス」と、「しょうないＲＥＫ」や「ディスカバー千里」の情報発信を図書館のホームページでリンクし、豊中市を中心とした地域のデジタルアーカイブへの展開を視野に取り組みを進める。
(4) 「暮らしの課題解決」支援サービスとして、他部局や専門機関との連携事業を進め、図書館機能の活用事例を具体的に例示していく。

中項目　９．市民との協働事業を推進しているか

評価ランク　　３

＜振り返り＞

平成 17 年度から始まった「しょうないモデル事業」は、「リサイクル本の活用による図書館の活性化と地域における共生を推進するための事業」（しょうないＲＥＫ）として、市民と図書館が協働で取り組んできた。子どもから高齢者まで幅広い参加があり、地域に定着した事業となっている。「しょうないＲＥＫ」の取り組みとして、「ごみの新分別啓発ビデオ」（減量推進課制作）の５カ国語吹き替えに着手したほか、情報発信の手段整備としてツイッターとフェイスブックを開設、23 年度には５周年記念事業を行い、これまでの活動の検証と課題などについて意見交換を行い、活動報告書の出版準備を始めた。今後も庄内地域に定着した事業として、協働スタッフと共に事業内容を検討し効果的に事業を進める。

17 年度から始まった「千里創造会議」は、「千里文化センター市民運営会議」として継続中である。図書館は千里コラボの一員として関わり、図書館が「市民公益活動促進」の場としても活用されるよう取り組みをすすめ、より暮らしやすいまちづくりにつなげていくことを目指している。

図書館では上記の他にも、地域教育協議会や「北摂アーカイブス」、子ども読書活動推進計画に関わる様々な取組みなどを、地域や市民との協働で実施している。

子ども読書活動推進連絡協議会の取り組みでは、「第１期実施計画」の振り返りをもとに、「第２期実施計画」につながっている。また、ブックスタート事業「えほんはじめまして」の拡充等により、関係団体との会議や打ち合わせ等情報共有の必要性が増しており、スタッフミーティング等を開催した。一方で事業を進めるにあたり、図書館における地域や市民との連携・協働のありかたを問い直す必要性も生じ、市民や関係団体とのよりよい協働のあり方を共有するため、職員研修等を行った。日常のなかで出来る情報共有について、これからも有効な手段を検討していきたい。

＜課題＞

○図書館職員は、市民や関係団体とよりよい協働のあり方を共有するため、引き続き研修等を行い、協働の原則（対等・相互理解・自主性尊重・自立化・目的共有・相互補完・公開・共に変わる・期限）に基づき認識を深め経験を蓄積し、今後も図書館が地域の一員として地域課題の解決の一翼を担えるよう、地域との関わりを深めていく必要がある。

＜今後の取組＞

○市民と図書館が対等な立場で相互理解を深めながら協働することで、地域の課題解決に関わるよりよい事業の実施や、ひいては豊中らしい公共図書館の在り方につなげられるよう、今後も情報や知恵や経験を持ち寄り、交流し、分け合う「地域の知の拠点」を目指す。そのために図書館の職員はその役割を深く自覚し、経験を職員間で共有・蓄積・継承し、市民とともに地域の未来を創ることに関わっていけるよう人材育成と研修に努める。

○地域で繰り広げられる様々な市民の活動を知り、図書館事業との関わりの視点でとらえる。市民との協働で培った知識と経験を、市の施策につなげるよう努める。

中項目　１０．市民団体・ボランティアの学習と活動を支援しているか

評価ランク　　３

＜振り返り＞

読書会について、図書館から資料を提供する登録団体数は横ばいである。グループによっては、メンバーの減少や開催頻度の減少傾向も続いている。読書会で取り上げる作品の検討のため、参考リストの作成、提供をしており好評である。

おはなしボランティアに対しては、貸出冊数が増加。小学校においての朝の読書の時間等で、読み聞かせが盛んにおこなわれており、それに伴い各館で日常的に読み聞かせに関わる相談に応じる機会も増えている。子ども読書活動推進計画によりその活動が拡がったことの表れと考えられる。

図書館関係団体・グループについて、会議数は増加しており、活発に情報交換がおこなわれている。平成 23 年度はブックスタート事業「えほんはじめまして」の拡充に伴い豊中子ども文庫連絡会との打ち合わせを行い、連携を密にするための会議の重要さを確認した。さらに協力者として新たなボランティアが加わった機会に、あらためて事業の趣旨や子育てと絵本について学ぶ場を持ち丁寧に取り組んでいる。図書館職員とボランティアが一緒に研修を受けるなど情報の共有を進め、フォローアップ講座や地域交流会の開催を継続実施することにより、職員の人材育成にもつながっているといえる。

点訳・音訳ボランティアに対しては、図書館に関わりの深い活動内容のため、その成果を図書館サービスに活かす等連携・協働が進んでおり、活動に必要な情報提供に努めている。音訳ボランティアフォローアップ講座は、継続して実施している。対面朗読ボランティアに対しては、交通費の確保に向けて取り組んだ。

集会室の提供について、千里図書館では、休館日にも使用が可能となるよう休館日の管理方法を検討して、有効利用をはかった。近くに公民館等のない図書館では、地元の人たちにとって、地域コミュニティの共有スペースとしての役割も果たしている。

＜課題＞

1. 読書会では、グループによっては、メンバーの減少や開催頻度の減少も続いている。図書館に資料の相談をされない自主運営の会も多く、把握が難しい。
2. 図書館関係団体・グループ活動の支援では、日常的に情報共有が不可欠である。
3. おはなしボランティアに対しては、 図書館職員の専門知識の向上が必要である。
4. ボランティア協力者の活動支援費の確保。
5. 音点訳図書データのアップロードとダウンロードが可能になる「サピエ図書館」入会登録の実現。
6. 集会室利用では、個々の活動支援にとどまらない、地域に還元されていくような支援のあり方の検討。

＜今後の取組み＞

(1)図書館を活動の場とする読書会活動について図書館のホームページ上でも紹介し、新規の参加者を掘り起こすとともに、多様な図書館活用の可能性を提示していく。

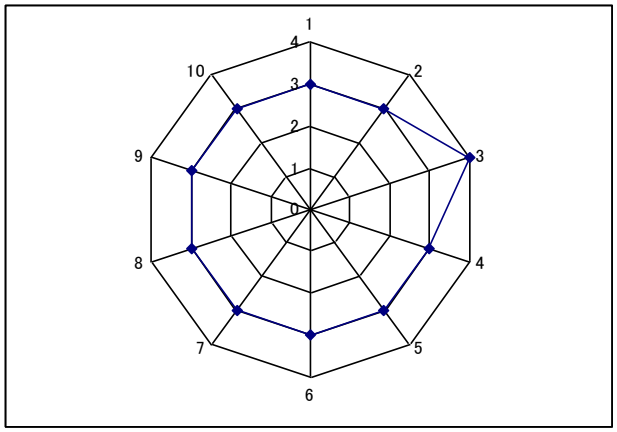
(2) 今後も情報提供を充実し、必要とされる活動支援につなげていく。

(3)フォローアップ講座や地域交流会の開催を継続実施する。図書館員が資料当に対する専門的な知識を深めるとともに、地域のボランティア活動の状況を把握し、相談等の支援に努めていく。

(4)ボランティア協力者の交通費を確保できるように、中長期的に取り組んでいく。

(5)音点訳図書データのアップロードとダウンロードが可能になる「サピエ図書館」入会登録の実現に向けて引き続き取り組んでいく。

(6)集会室利用が幅広い図書館利用につながるよう、グループ同士の交流や活動報告の機会を設け、公民館とは異なる集会室条件を活かし、活動の成果や影響が地域にひらかれ広く市民に還元されるよう、提供のありかたを検討する。



グラフNO	中項目
（2）図書館の設置目的・使命の達成状況に関する評価	
1	市民が求める資料や情報を収集し、迅速・的確に提供できるか
2	他の自治体の図書館や大学・類縁機関との相互協力をすすめているか
3	市内の公共施設との連携・協力を推進し、市民の多様なﾆｰｽﾞに応えているか
4	ITを活用した図書館ｻｰﾋﾞｽの向上を図るとともに市民の情報活用を支援しているか
5	子どもの読書活動を推進しているか
6	学校・学校図書館への支援と連携を推進しているか
7	高齢者、障害者及び外国人の読書環境づくりをすすめているか
8	地域情報センターとして積極的に活動しているか
9	市民との協働事業を推進しているか
10	市民団体・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの学習と活動を支援しているか

４．今後の方向性

豊中市立図書館評価システムのマネジメント

（１）今後の評価基準

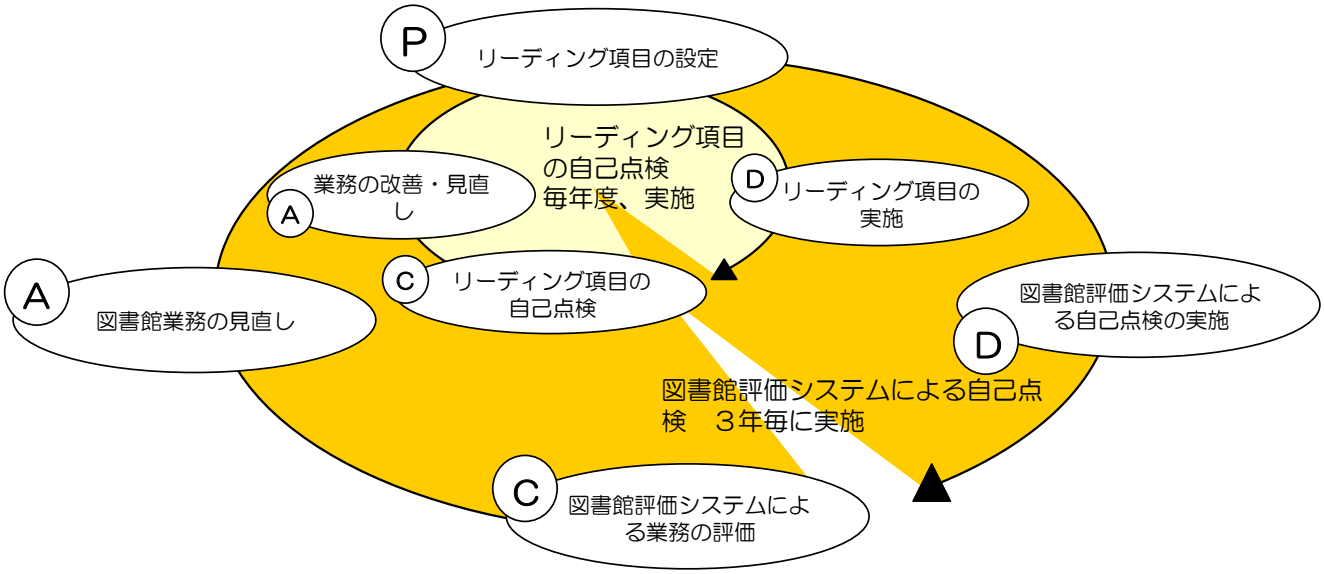
平成２３年度以降の中項目・小項目の評価の方法は、各項目の達成状況に応じて、次の５段階の数値で表す。評価を数値化し、可視化することにより、達成状況の的確な把握と評価、対策の検討に役立てていくものとする。

評価ランク	評価基準
５	業務の目標指標を１割以上、超えた。
４	業務の目標指標以上であった。
３	業務の目標指標の７６％（（貸出冊数の全国平均）／（貸出冊数の豊中市））以上であった。
２	全業務の目標指標の７５％以下であった。
１	取り組んでいない。

※中項目・小項目によっては、定量ではなく定性によって評価を実施しているものある。それらについては、上記の評価基準に準じて、評価を行うものとする。

（２）本評価システムの PDCA サイクル

本評価システムに基づく自己点検は、３年に一度、実施する。また、別途、定めるリーディング項目は、毎年度、進捗状況の自己点検を行なう。



豊中市立図書館評価システムの PDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクル